津堅（チキン）

津堅の歩みと方言

津堅島は勝連半島の東南海上約四㎞に位置する島で太平洋の荒波から中城湾を守るように横たわっている。

津堅は『南島風土記・東恩納寛惇著』によれば「尚豊王代は大里間切、その後西原間切に移り、また勝連に移り・・・」とある。勝連間切になったのが尚貞王の時代（一六七五年）といわれる。

去る沖縄戦で離島では座間味や伊江島などが激しい戦場になったことはよく知られているが、中部の津堅島が激戦地であったことをうるま市民でも知る人は少ない。中城湾の守備に格好の位置にあった津堅島は県下でもいち早く軍事基地として要塞化され守備隊が置かれたため住民も激しい戦闘に巻き込まれた。

かつて津堅大根は「津堅テーク二」として知られていたが、近年は「キャロットアイランド」として津堅ニンジンやモズクの産地として馴染み深い。また夏は海のレジャー地として賑わっている。

去る三月にうるま市民芸術劇場で開催されたうるま市与勝五島の伝統芸能「島々の薫風、島々の芸能」で上演された津堅の「初起こし」のノロの流麗なことばのスーラーサ（優美さ）に感動した。津堅の方言の抑揚は時には波の音にも似て楽しい。『津堅島の記録・比嘉繁三郎』からいくつか拾いあげてみると傾向としてサが ハへ、例えばアササン（浅い）がアサハン、カナサン（愛しい）がカナハン、チがシへ、例えばマチヤ（店）がマシヤ、ニチ（熱）がニシ、ハがパへ、例えばハタキ（畑）がパタキ、ハンタ（崖）がパンタの如くである。こちらではほろ酔い加減はサーフーフーであるが津堅ではサープープーでほろ酔い加減というより飲み過ぎてタンチ（短気）プープーしている感を受ける。また度々のことを「シバーシバー」と言い、古語が残っていて興味をそそる。

津堅の語源と意味

津堅は方言では「チキン」と呼ばれ、古い記録には「津見島」、「津奇奴」、ペリー艦隊日本遠征記には「Ｔａｋｉｎｇ」とある。津堅の語源については島の言いつたえとして中城間切の喜舎場子という人がこの津堅島に三たびの試みでやっとたどり着き思わず「チキタルチキン、トゥマタルトゥマイ」（着いたぞツケン、止まったぞトゥマイ浜）と叫んだので津堅という島の名が生まれたという。

また『沖縄地名考・宮城真治』には「島の周囲には大いなる岩が多い。思うにシキン、則ち岩多き新墾の島の義で名づけられたものではあるまいか。」とある。つまり「シ」は岩を意味し、ケンは開墾地と解釈している。

津堅を「ツ」と「ケン」に分けてその意味を考えると、まず「津」のつく地名は三重県の津をはじめ、大津、唐津など全国的に分布し、港を意味していることから津堅のツもその位置や自然条件からして港を指していることは間違えない。次にケン、キン系統の地名については県内には、具志堅、古堅、宇堅、久手堅、健堅、金武などがあり、いずれも丘陵地・台地に位置している。地名のケン・キンは丘陵地の意がある。津堅島は全体的に台地状の低平な島であるが、近海を航行する船にとっては高度約三八Ｍの新川グスク一帯の丘陵地が目標である。従って津堅は「港のある丘陵地、丘陵地の港」と考えることができる。ただ古堅、喜名、屋慶名などキナ系地名として「開墾地」の意味も考えられる。

ホートゥガー

島の南西海岸にハトが発見したので「ホートゥガー」と名付けられたという井泉がある。ここはまた子宝を授かる聖地として崇められている。

この地名の語源について地名研究家の奥田良寛春氏は「ホートは鳩の訛りでもある語だが、韓語では海をパダカといって、鎌倉江ノ島の裸観音が当然海の守護神となっているのと同様、港をハトバという類例である。」としてその語源を韓語系に求めている（『南島の地名・第一集』）。しかしその原語は古語の「ホト」で意味は「陰の場所」を指し、ホートゥガーは「岩蔭にある井泉」という意味になり、周囲の状況と一致する。

アフ島とキガ浜

津堅島の周囲の海浜にはそれぞれに地名がつけられ、その由来が伝えられている。クワーチン浜、アギ浜、キガ浜、ワナ浜、ンナトゥ浜、ヤジリ浜、タナカ浜、セナハ浜などがあり、ヤジリ浜の向かいにはアフ島がある。「アフ」のつく地名は奥武島や奥武、オールなどの地名で県内に多く分布している。しかもそれは陸から離れた小島になっている。それについては「害虫や悪霊をオオル、オオグ島」や「青、太古の墓地から来た地名」などの説がある。

島の東にあるキガ浜は「キガ浜貝塚」として知られているが島の伝説によればここで漁の帰りに刺身をきざんで食べたので「キガ浜」になったという。おそらくこの海岸にあった岩がまな板のような形になっていたのでこの名がつけられたのであろう。